



# 役員会だより

東京都立八王子東高等学校PTA

平成21年9月11日発行  
会長 田窪麻周  
沖縄大会報告書  
ホームページ  
<http://www.hachiojihiga-shi-pta.org/>

## 第59回全国高等学校PTA連合会・沖縄大会

### 報告号



全体会会場となった沖縄コンベンションセンター



「全国大会会長表彰状」を手に

## 八王子東PTAが全国大会 会長表彰団体選ばれました！

8月26日、27日、28日の3日間にわたって、南国沖縄で第59回全国高等学校PTA連合会大会・沖縄大会が開催されました。全国から1万1千人のPTA関係者が沖縄に集い、27日の全体会や講演会、28日の7つの分科会を通じて、PTA活性化に向け有意義な交流をはかりました。

八王子東高校PTAからは正副会長3名が出席しました。今大会において八王子東高校PTAは昨年度の愛知大会での発表などが評価されて、「全国大会会長表彰団体」として表彰状をいただきました。

これまで当PTAが培ってきた保護者と先生方との信頼関係を深める取組みや、ともに八王子東高校応援団として子どもたちを見守る姿勢が評価されたのだと思います。日頃、PTA活動をご理解いただき、快く協力してくださる会員の皆さまと先生方に改めて感謝申し上げます。次頁以降は、出席した分科会の報告です。(表彰状はPTA室です。)



沖縄大会シンボルマーク  
(赤い縁は沖縄の太鼓、それに青い海と空、シーサーとサンシンを表現しています)

# 第1分科会 「学校教育とPTA」

8月28日 コンベンションセンター 定員 3500名

第1分科会は昨年の愛知大会で八王子東高校PTAが事例発表をした分科会です、今年はどうのような発表がなされるのか興味をもって参加しました。

発表したのは4校。岩手県の盛岡農業高校は1年生は一度は、全員が寮生活を体験するところに特色があります。そうした中でPTAは、子どもの心が見えなくなったという、一人のお母さんの話をきっかけに臨床心理士を招いての勉強会を企画した事例、子どもを講師にしたパン作りの講習会を開いて好評であるという報告をされました。会員と子どもたち双方に目配りした活動がなされていると感じました。

茨城県の石岡第1高等学校は、PTAを活性化するために活動の機会を増やしたり、PTA総会に向けて授業参観を組んだりと学校側と協力しながら、試行錯誤していらっしやる現状を話されました。

また、新潟県糸魚川市の白嶺高校は「もちつきがしたい」という前会長の一言が引き金になってPTAが活性化していった様子を報告。

「PTAが学校と地域を結び付けるコーディネータの役割を果たすことができる」との言葉は示唆に富んだものだと思います。



開会のあいさつをする新垣実行委員長（全体会）

最後は島根県の出雲商業高校の出商デパートの実践例。商業学校の実習の一つとして2日間限りのデパートを開いているとのこと。集客数2万、売上900万のオバケ行事だそうです。

PTAはもちつきで盛り上げたり、集客の声かけなどで協力しているとのことでした。

目新しい発表はないように思いましたが、それぞれが自分の学校の状況をしっかり見つめ、何ができるか、何をしたらよいかを考えて、日々の活動をつないでいる姿に共感しました。

助言者の上門清春沖縄大学客員教授は、生き抜く力は体験+考える力であり、学習は考える力を養うと話されました。またもう一人の助言者、新崎速 沖縄県立那覇高校長はPTAはより良い保護者、教師になるために手を携えることが大事。地域社会をよくする活動でもあると話され、時々には自分たちの活動が本当のPTA活動か反省する謙虚さを持ってほしいとまとめられました。会場からは質問や意見が相次ぎ、各地のPTAの元気さに圧倒されました。

（報告 副会長・原 和美）

# 結

沖縄大会のテーマは「結」

「結の精神（ゆいまーる）で育む 青少年の美ら肝心（ちゅらちむぐる）」というサブタイトル・・・

沖縄語はむづかしい。



元氣いっぱい沖縄大会ホスター！

## 特別第1分科会 「環境教育とPTA活動」

8月28日 宜野湾市民会館 定員 480名

### ●趣旨

近年の地球温暖化による異常気象を考慮すると、自然環境保護や地球温暖化防止について真剣に考えなければならない。各家庭や学校が、課題解決にむけてどう取り組むべきかを考える。

### ●基調講演 沖縄大学学長 桜井国俊氏

「未来を担う若者たちの環境教育」

～地球代で考え、足下から行動を起こす～

### ●パネルディスカッション

#### コーディネーター

#### ◆長田小学校校長 横山芳春氏

H15年件初の民間人等校長として宇栄原小学校長に就任。H15年NHK 沖縄で「めざせ！エコライフ」の制作と出演

#### パネリスト

#### ◆琉球大学教授 伊波美智子氏

サステナブル・ツーリズムが目下の研究課題 琉球大学においても環境に関する様々なことに取り組む。

#### ◆環境NPO「アースの会」代表 宮良弘子氏

アースの会は、グリーンコンシューマー（環境に優しい行動をする市民・消費者を増やす活動）をしている市民団体。環境教育の啓発活動として、地域団体や学校へ出前講座や、エコッキングの実践授業を行う。

#### ◆沖縄県立宮古総合実業高校教諭 前里和洋氏

同校環境班の顧問。2004年、宮古島の地下水に関する研究発表で、アジアで初めてストックホルム青少年水対象（水のノーベル賞）など数々の賞を受賞。

#### ◆沖縄尚学高等学校2年 松本理沙さん

iEARN(International Education and Resource Network) 部部長  
昨年、エコハピ沖縄にて準優勝。部活動では、環境問題を通して国際交流する。

沖縄の車社会が環境に及ぼす影響や、沖縄の自然の危機的状況が紹介されつつ地球規模での対策として足下から意識を変え、実践してい

く必要性が語られた。基調講演の後、パネリストは、それぞれの活動内容の発表を行い、質疑応答および意見交換を行った。PTA 活動にむけても、環境教育の重要性をアピールする分科会であった。

印象に残った沖縄ならではの取り組みを紹介する。本土復帰以降、宮古島の地下水は汚染された。島のほとんどが農地で、地下水の成分中、化学肥料と家畜排泄物が飲料水の基準をはるかに超える数値になってしまった。宮古島では水道を100%地下水でまかなっている。そこで、沖縄県立宮古総合実業高校の前里先生は、地下水を教育資源として、生徒達の成長に役立つ工夫ができないかと考えた。島の水を分析研究、土壌分析、有機肥料の開発、サトウキビの搾りかすで有機肥料を作り農家へ配布。また、サトウキビの農閑期にそばを栽培し、CO2削減にも取り組んだ。島の環境をなんとか改善したいという思いと環境を通しての教育を結びつけた例である。ストックホルムで英語での研究発表を行い、その結果、2004年にアジアで初めてストックホルム青少年水大賞（水のノーベル賞）を受賞した。彼らは、最初まったく目立たない生徒達であったが、大きな成長を遂げた。発表を行った3名中2名は琉球大学に進学し引き続き環境問題を専門分野として研究を続けている。また、島民の環境への意識はかなり低く活動に対して多くのクレームもあったという。現在農家の意識は変わっている。「子や孫も同じように農業ができるようにしたい」という言葉さえ聞かれるようになり島民から全面的な支援を受けた教育研究活動になっている。 （報告 会長・田窪 麻周）

## 特別第2分科会 「親と子のシンポジウム」

8月28日 浦添市 てだこホール 大ホール 定員1000名

### ●趣旨

子どもを取りまく社会環境が大きく変化し、子どもの、人間としての豊かな成長に影を落としている。そのような中、豊かで健全な地域社会や家庭や人間関係をどう創り出していくか、それぞれの地域の歴史や文化を考え地域活性化や人間関係の在り方・生き方について世代を超え、親と子が本音で語り合い、夢を発信する場とする。

### ●基調講演

沖縄テレビ放送常務取締役 前原 信一 氏  
「世代を超え語りつなぐ次代への夢」

～沖縄の心「チムグクル」を大切に～

大会のサブテーマ「ユイマール」とは、村落共同体の中で築き上げた相互扶助の精神。「チムグクル」とは、気質・メンタリティーという意味である。

私は、世界で活躍する沖縄県出身者を紹介する「世界ウチナーンチュ紀行」の番組制作に携わった。日系移民250万人のうち沖縄系の移民は30万人にのぼる。

海外に夢を託して、貧しい沖縄を離れて行った沖縄県人＝ウチナーンチュは、そのアイデンティティー形成の礎として、故郷の沖縄で育まれた助け合いを基調とした「チムグクル」で、さまざまな苦難を乗り越えていった。

親しみやすさ、オープンマインド、会えばみな兄弟という意味の「イチャリバチョーデー」や、細かいところにこだわらないライフスタイルを表す「テーゲー」といったチムグクルが今も海外で沖縄の心を広げ、継承されている。

一方、沖縄では、本土復帰後、急速に本土と

の一体化を進める中で、「チムグクル」の大切さを置き忘れてきたようだ。

いまこそチムグクルを再認識し、①共生・寛容・相互理解の地域社会づくり。②世代間のコミュニケーションを通して学ぶこと。③ウチナーンチュ・アイデンティティーの継承。④異質な文化と自然風土の保全を図り、子どもたちに伝えていきたい。

### ●パネルディスカッション

コーディネーター

◆沖縄大学教授 加藤 彰彦氏

子ども論、福祉論を担当。野本三吉の名で「子どものいる風景」などの著書がある。沖縄子ども研究会代表。

### パネリスト

◆浦添市てだこホール 館長 比嘉 悦子氏

米国統治下の沖縄で、東京や西洋に目が向いていた。アメリカの奨学金を得て留学することにしたハワイ大学在学中に沖縄民族音楽に出会う。ハワイの沖縄系移民の方から、沖縄の文化を知らされた。帰国後、沖縄各地をまわり、古謡やわらべうたを採集し始める。沖縄の祭は地域力の要。沖縄文化を次世代にどう伝えていったらよいのか考えている。

◆(株)マドンナ YOKANG 山内 カナナ氏

紅型職人の家に生まれる。忙しい両親に代わり、祖母に育てられる。旅行会社勤務を経て、渡仏。言葉のわからないフランスで、沖縄民謡にあわせて両手を頭の上に掲げて左右に振る踊り、カチャーシーを披露することで自分自身を受け入れられた経験を持つ。自分を好きになり、心を開き、大人や他者とぶつかることが大

事。傷つくかもしれないが、その結果やさしくなることができる。現在は、沖縄の色と柄でコミュニケーションを取ろうと考え、かりゆしウェアを中心とした服飾ブランドを経営する。

◆沖縄県立八重山高等学校教諭 仲村優子 氏  
琉球大学大学院で、沖縄の人の心に興味があり、琉球列島のことわざを研究する。編著に「黄金言葉（くがにくとぅば）—ウチナンチュが伝えることわざ200編」がある。言葉は、人と人を結ぶ絆、ことわざは地域で育てた子どもたちの心を支える柱である。かつては、一人の子に500のことわざが伝承されていた。「世の中を捨てても、自分は捨てるな」といったことわざを、これからも、子どもたちの励ましの言葉を受け継いで、伝えていきたい。お父さん、お母さんは、自分の支えになっていることわざを、お子さんに伝えて行って欲しい。

◆沖縄県立浦添高等学校3年 内間琴乃 さん  
沖縄県伊江島生まれ。高校進学を機に、本島にてひとり暮らしを始めた。伊江島では、青年会がエーサーを指導したり、部活動の指導も地域の方だったり、地域全体で子どもを育てている感じだった。本島では、近所との挨拶も無く

不安だったが、おなじように伊江島から出てきている友だちと助け合っている。離れてはじめて、島のよさ、母の存在の大きさに気付いた。二つの島を体験できたことは、自分を成長させてくれたと思うし、誇りである。

◆コーディネーター 加藤 彰彦 氏  
子どもは、地域のみんなで一緒に育てることが大切である。忙しい両親に加えて、祖父母も積極的に参加していくことになるだろう。「祭」も、地域のすべての人が集まって協力し、ひとつのものを作り上げるという意味で、大切にしていける必要があるだろう。

また、一度、自分の故郷を離れ、外に出て、別の文化に触れることも必要。さらに、子どもを変えたければ、まず、親が変わることから始めよう。

最後に、比嘉氏が、沖縄に古くから伝わる教訓歌「ていんさぐぬ花（鳳仙花）」を歌って、閉会した。

その歌詞は、鳳仙花の花びらは爪を染め、親の言葉は肝に染める。天空の星は数えられるかも知れないが、親の言葉のありがたさは計り知れないほど大きいという意味である。

（報告 副会長・三宅 方美）

\*\*\*\*\* 全国高等学校連合会大会・沖縄大会プログラム（概略）\*\*\*\*\*

- 26日夕 歓迎レセプション
- 27日14:10 全体会
  - 15:20 講和 講師:琉球大学 新城 澄枝氏  
「18才までに育てたい食の自己管理能力」
- 28日9:40 7つの分科会
  - 12:30 高校生のアトラクション エイサー・琉球舞踊
  - 13:20 記念講演 講師:宮城能鳳(人間国宝)  
「伝統楽劇 組踊の魅力」
  - 14:55 閉会式  
・大会宣言採択、次期開催県挨拶など



高校生のアトラクション・エイサー

## 第21回東京地区高等学校PTA連合会大会報告

大会テーマ 『ネット社会におけるPTAの役割』

サブテーマ「デジタルメディア社会と子どもの健全育成」

日時 7月5日(日) 13時30分～16時00分

場所 国立オリンピック記念青少年総合センター セミナーホール

### ◇趣旨

インターネットや携帯電話などの普及が急速に進み、違法・有害サイト等に起因する問題が多発、青少年の健全育成に有害な影響を及ぼしている。デジタルメディア社会における親の役割・接し方、これからの対応策等を考えたい。

### ◇基調講演 コラムニスト 唐沢 俊一 氏

#### 「ネット社会におけるPTAの役割」

#### 一 デジタルメディア社会と子供の健全育成一

80年代以降、人々は社会での辛さから目を背け、ネットというバーチャル世界へと流れた。しかし困ったことに、話や講演会などはそばから消えていくが、ネット上では文字として残ってしまう。そこではニュアンスや、発言者のキャラクター等はまったく伝わらなかったり、消される。そして「炎上」という事態にもなる。

ネット上では、みんな人に教えたいし、聞くとすぐ教えてくれる。便利である反面、人の書き込みが欲しいがために刺激的な言葉や、過激な内容になりがちでもある。子供たちは、そういう仕組みに気づかないでどっぷりネット社会に浸っている。

今の子は、素直で賢いと言われるが、現実社会の不条理には対応できない。その結果、表の人格は本当にいいが、ネットでは違うこともけっこう多い。親は子供に対してどうするべきか。ネットに「触れさせない」ではなく「いい方向に使う」ということを意識させるべきである。子供からネットのことを教わりながら、一緒に

考えることもできるだろう。子どもが「ネット」に入る前や携帯電話を持つ前に、親はその「有効性と危険性」を伝えておく必要がある。

### ◇ パネルディスカッション

<コーディネータ> 渡辺 克巳氏

<パネリスト>

#### ●Kさん (日本電子専門学校専任講師)

学生の就活は申込みから内定まで、全てメールで、以前のような電話での生の声の応答はない。逆に、対人関係が苦手な者が、メールで励まされ退学を免れたこともある。

#### ●Kさん (都立高校PTA会長)

高校で配信メールを導入。保護者の登録が78%に達しており、情報が届きやすくなった。

#### ●Kさん (元都立高校PTA会長)

高校で、個人情報保護の観点からか電話連絡網をつくることができなくなった。メールは、有効な情報伝達ツールであろう。

#### ●Mさん (都立高校PTA会長)

中高一貫校であるがゆえに、それぞれ発達段階に応じた対応の必要性を感じている。

<コメンテーター>唐沢 俊一 氏

インターネットが特に危険なのは、現実経験の少ない者、自己のアイデンティティが確立していない者が、ネットの中だけに埋もれてしまう時である。親が、子どもと現実社会との関わり方を把握していれば問題はない。日ごろの親子のコミュニケーションが大切である。

(報告者：田窪会長・三宅副会長)